明恵上人遺跡発掘調査概報

1992. 10

㈶ 和歌山県文化財センター

調査区遠景（西から）

建物群（南から）

出土遺物（中国製磁器）

序

明恵上人遺跡は和歌山県の北部、有田郡金屋町に所在する鎌倉時代の遺跡であります。

遺跡名ともなっている明恵上人は、鎌倉時代の高僧であり、京都の高山寺を開いた人物としても広く知られていますが、その上人の生誕の地とされているのが本遺跡であります。

このたび、遺跡内に公園広場・駐車場等の建設計画がもちあがり、この工事に先立って、当センターが発掘調査を実施いたしました。

本書は、その成果をまとめた概要報告書でありますが、当地方の歴史を知る上での一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にあたり種々御協力をいただいた関係各位並びに地元の皆様に深く感謝の意を表し、併せて厚くお礼を申し上げます。

平成４年10月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長　仮　谷　志　良

例　　言

1．本書は公園広場建設に伴う明恵上人遺跡の発掘調査概要である。

2．発掘調査は金屋町教育委員会より財団法人和歌山県文化財センターが委託を受け実施した。

3．発掘調査にあたっては、金屋町教育委員会ならびに地元の方々の協力を得た。また、本書の遺物実測図およびトレースにあたっては村上敏子、玉井朱美、谷口敦子の助力を得た。そのほか出土遺物中の瓦については、大阪府文化財協会・駒井正明氏より種々ご教示いただいた。記して感謝の意を表したい。

4．本概報では遺構の略号として、建物（ＳＢ）、溝（ＳＤ）、土坑（ＳＫ）の略号を使用した。これらの略号は本文、実測図、写真図版すべてに共通する。

5．遺物実測図は原則として１／４で掲載した。ただし写真については任意の大きさである。

6．発掘調査ならびに本書の執筆・編集は文化財センター技師・村田　弘が担当した。

目　　次

巻頭カラー図版

序

例　言・目　次

Ⅰ　位置と環境……1

Ⅱ　調　　査……3

1　遺　構……3

2　遺　物……11

Ⅲ　ま と め……16

図１　調査区位置図……1
図２　基本土層図……3
図３　明恵上人誕生古跡絵図…4
図４　遺構平面図……5・6
図５　ＳＢ－01実測図……7
図６　ＳＢ－02実測図……8
図７　ＳＢ－03実測図……9
図８　ＳＢ－04実測図……9
図９　ＳＢ－05実測図……10
図10　遺物実測図（１）……13
図11　遺物実測図（２）……14
図12　遺物実測図（３）……15
図13　主要遺構配置図……16

表１　掘立柱建物一覧表……17

写真１　明恵上人誕生……2
跡卒堵婆
写真２　明恵上人胎衣塚……2
写真３　発掘作業風景……3
写真４　柱穴内石出土状況……7

図版１　調査区周辺航空写真
調査区前景（南東から）19
図版２　調査区全景（北から）
調査区全景（南から）…22
図版３　調査区西半部（南から）
調査区北半部（南から）21
図版４　溝１・２・３（上から）
溝１・２・３（北から）…22
図版５　建物１（東から）
建物１（南から）……23
図版６　建物２（東から）
建物３・４（北から）…24
図版７　遺物写真……25
図版８　遺物写真……26

Ⅰ　位置と環境

遺跡の所在する金屋町は、和歌山県の中北部、有田川の中流域に拓けた人口10,500人ほどの町である。町域は全体に丘陵性に富む地形で、河岸段丘を除けば平野部は少ない。このためか、町内には糸野遺跡・岩野河遺跡などの縄文時代の遺跡はあるものの、続く弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は現在のところまったく知られていない。

奈良・平安時代についても不明な部分が多いが、荘園としての開発は早くからなされていたもようで、石垣庄と呼ばれていた地域が今日のほぼ町域に相当するものと考えられている。その成立の年代は明らかではないが、庄名の文献上の初見は正暦３年(992)まで遡ることができる。それによれば当地は、左大臣藤原仲平の遺領であったが、その子孫に伝領されたのち、右大弁兼内蔵頭平惟仲が直米1800石で買得したとされる。その後、長保３年(1001)に惟仲は、この地をみずから建立した京都白川寺喜多院に他の諸領とともに施入した。ついで建久２年(1191)には長講堂領に、さらに建保２年(1221)には宣陽門院領となっていたことがその後の諸文献から伺える。中世に入ると、承久３年(1221)、当地の地頭職に在地の有力者である湯浅宗光が補任され、従来の領主である本所領家にかわって事実上の支配権を得ることになる。

今回調査を行なった明恵上人遺跡は、この時期、中世の遺跡であり、遺跡は金屋町の南方、大字

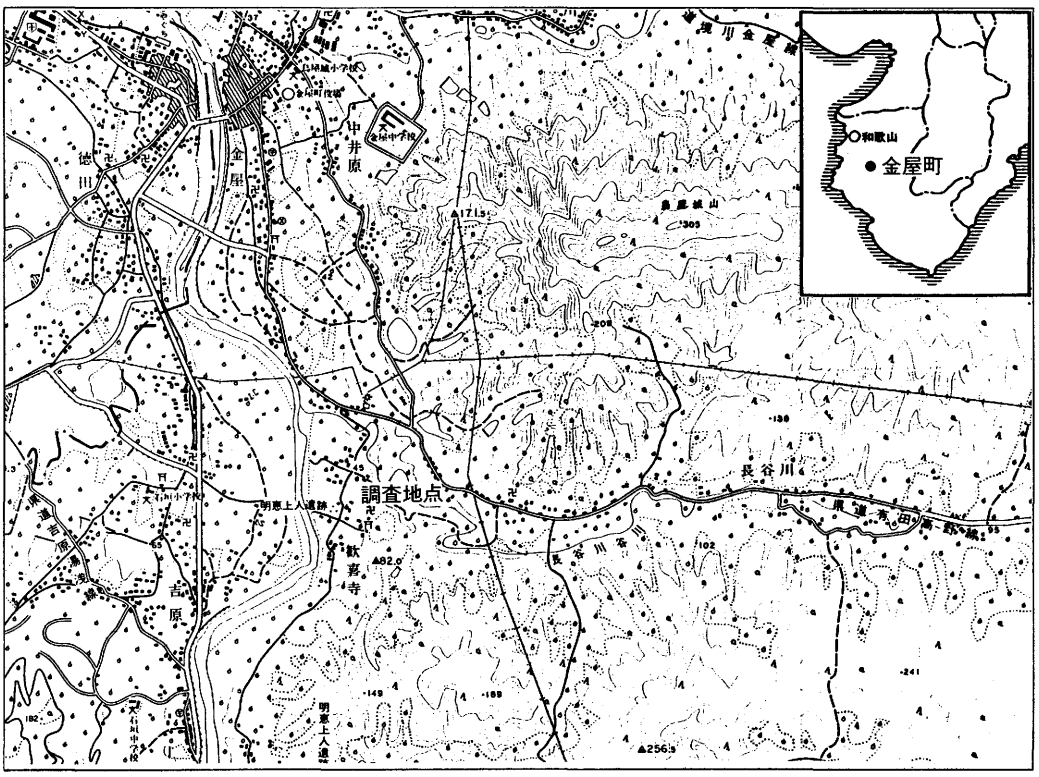


図１　調査区位置図

歓喜寺に所在している。遺跡のすぐ西側には有田川が流れており、遺跡はその右岸の標高50mほどの河岸段丘上に位置している。

遺跡名ともなっている明恵上人は鎌倉時代の高僧で、華厳宗の中興の祖、京都の栂尾にある高山寺を開いた人物として知られるが、その上人が生まれたのがここ金屋町歓喜寺(石垣荘吉原村)である。

調査区のすぐ東隣には国指定の文化財となっている康永3年(1344)の銘文をもつ生誕地を示す卒堵婆が現存している。(写真1)また、調査区内には上人の胎衣塚と言われる石碑が設けられている。(写真2)

明恵は、この地に平安時代の末、承安3年(1173)に生まれた。父、平　重国は高倉院の武者所に仕えていた武士で、祖父の代からこの石垣庄に本拠をもっていたとされる。また、母は在地の有力者であった湯浅宗重の娘であり、その出自は裕福な地方豪族の子息といえる。その明恵に転機が訪れるのは治承4年(1180)、明恵が8才の年で、この年の1月に母を病で、9月に父を戦で亡くする。その後、母方の伯母に引き取られたのち、9才で仏門に入るべく上洛。以後、京と地元を頻繁に行き来し修業に明け暮れ、貞永元年(1232)60才で示寂するまで旧仏教側を代表する僧として重きをなすのである。

寂後、地元の明恵ゆかりの地には卒堵婆が建てられたり、弟子の喜海によって再建されたという歓喜寺が近くにあるなど町内にはその遺徳を偲ぶ遺跡が数多く所在している。

写真1　明恵上人誕生遺跡卒堵婆

写真2　上人胎衣塚

II 調　査

今回の調査対象面積はおよそ460㎡である。現況は八朔畑となっていたが、昭和30年頃まで当地および周辺は水田として利用されていたということである。先述したように、調査区のすぐ東隣には生誕地を示す卒堵婆が建てられているが、ここの田の字名は上人田であり、その東側は念仏田と呼ばれていたことが知られている。

調査区内の基本層序は図２に示すように、耕土・床土の下に盛土とおもわれる黄色の土が厚さ20㎝ほど堆積しており、さらにその下に厚さ８㎝ほど灰色の土が堆積している。この灰色土は遺物包含層で、瓦器碗など磨滅した中世の土器が出土している。

遺構面は、この包含層を除去した面で、黄茶色の地山であり、現況の地表面より約50㎝ほど下がったレベルである。

検出した遺構には掘立柱建物・溝・土坑などがあり、遺物としては瓦器碗を中心に瀬戸の皿・常滑の壺・東播系の須恵質の鉢などが出土している。以下、これらについて詳述する。

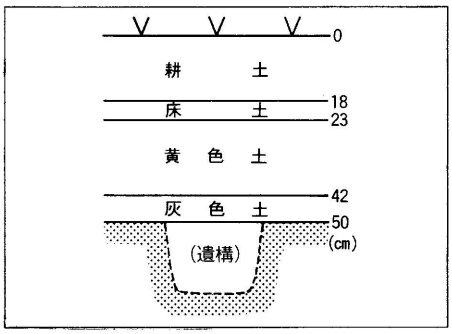


図２　基本土層図

写真３　発掘作業風景

1　遺　　構

調査区の南側に先にも述べた明恵の胎衣塚といわれる石碑が建っている。この現存する胎衣塚そのものは盛土の上につくられているもので、少なくも近世以降のものであるが、この胎衣塚をほぼ中心にして回る溝(溝―1・2・3)を検出した。この溝はいずれも幅約1.2m、深さ約20cmを測り、コーナー部が途切れ陸橋状になっている。南側については調査区外となっているため確認できなかったが、おそらくこの溝は四周するものと思われ、この中の区域を画する施設であったものと考えている。

この方形の区画は一辺約13mの規模を有するもので、十分に建物の建つスペースがあるが、ここでは明瞭な建物跡は検出できなかった。後述する掘立柱建物の遺構の遺り具合からみて後世に削平されたとは考えがたく、礎石建ての建物であったか、あるいは区画内は基壇状に盛り上げられていた可能性が考えられよう。その場合、建物としては、方形の御堂などのようなものを想定している。なお、この溝の廃絶時期は出土遺物からみて13世紀代であり、切り合い関係からはＳＢ－02より新しい時期ものであることが判明している。

土坑(ＳＫ－10)　長径２ｍ、短径1.5ｍ計り、深さは約15cmである。この中からは瓦片が多く出土しているが、他の遺構の埋土がすべて茶褐色の土であるのに対しこの土坑の埋土は上層の包含層と酷似した灰色の土であつた。このことから建物などの遺構とは時期の異なる可能もある。

図３　明恵上人誕生古跡(紀伊名所図会より)

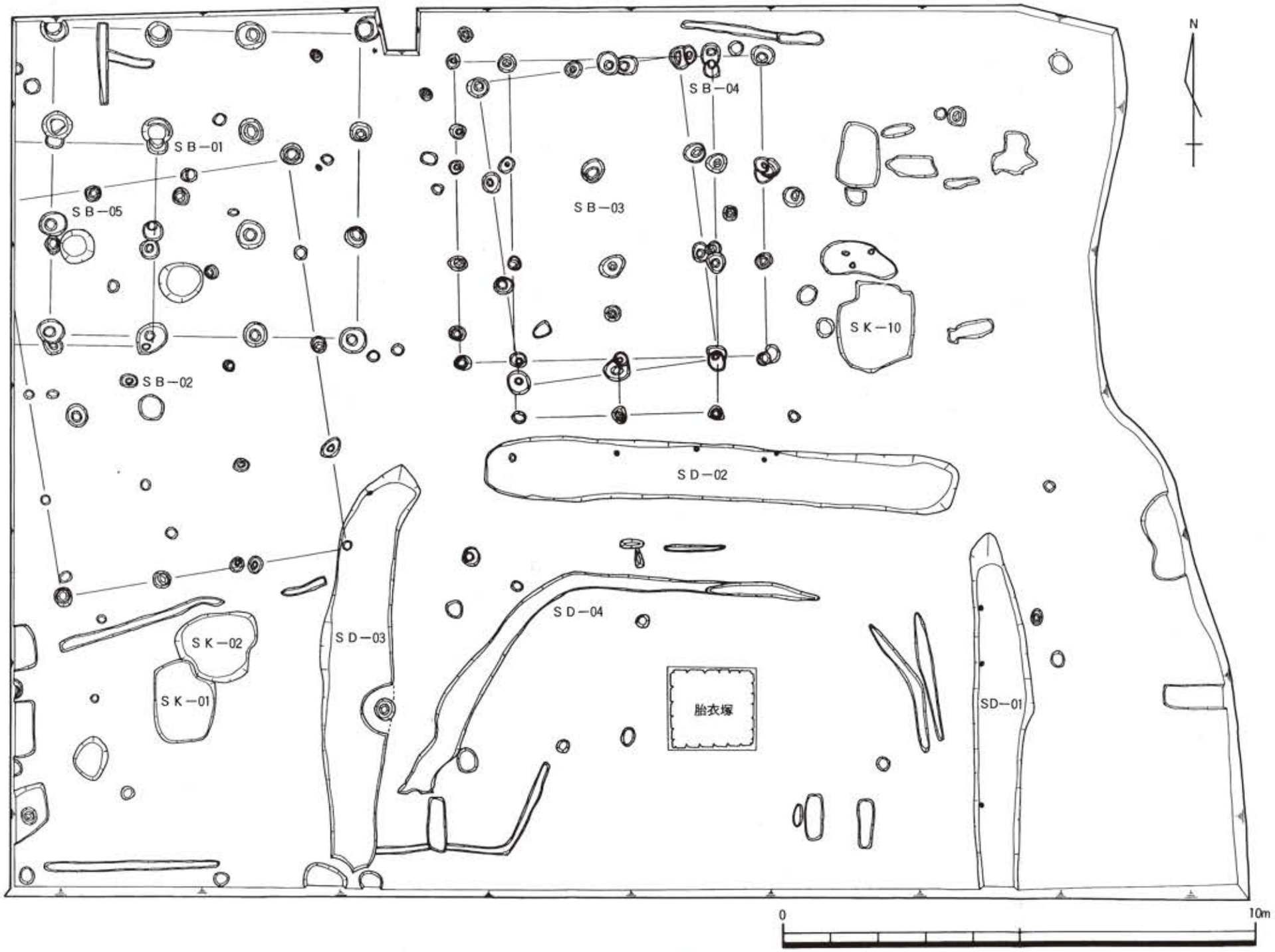

N
SB−01
SB−02
SB−03
SB−04
SB−05
SK−01
SK−02
SK−10
SD−01
SD−02
SD−03
SD−04
胎衣塚
0
10m

図4　遺構平面図

ＳＢ－01　東西４間、南北４間の規模をもつ総柱の建物である。柱間はいずれも2.1mを測る。深さ50cm前後である。柱については、まったく遺存していなかったが、掘形内の土質の違いから25cmほどと推定される。16個所の堀形の内、西北部の３個所については、その底部で20cm前後の平たな石を検出した。これらの石については、検出状況から廃絶時に投げ込まれたものではなく、当初から埋設されていたものと思われるが、すべての堀形に見られないことから沈下を防ぐための礎板というより柱の高さを調

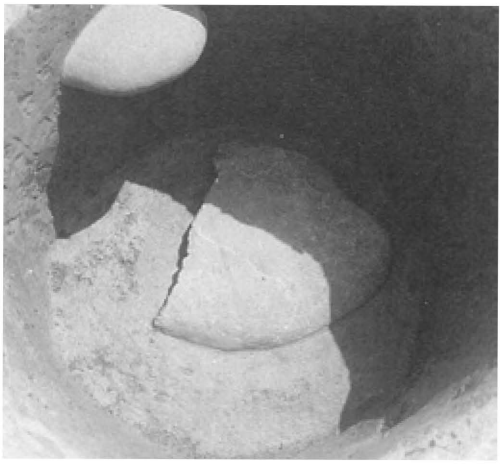


写真４　柱穴内石出土状況

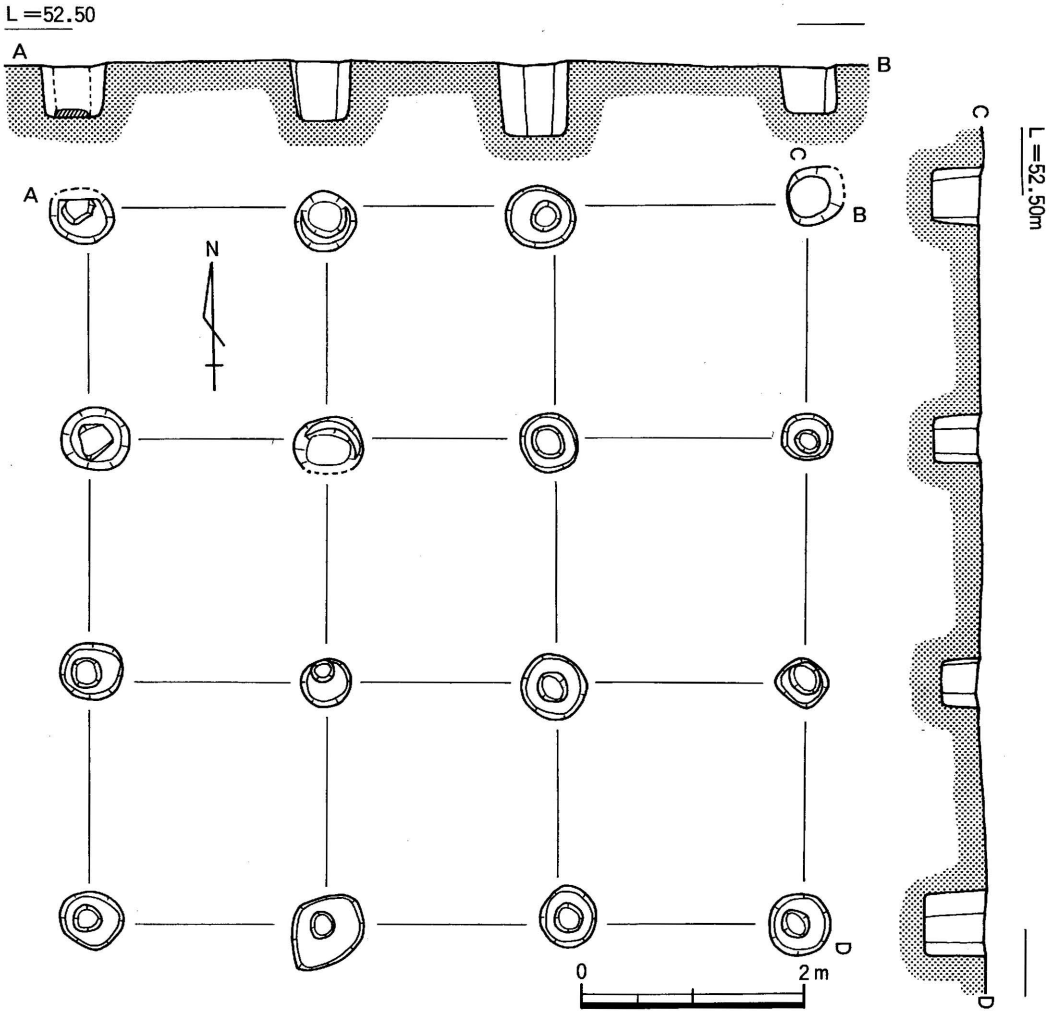


図５　SB—01実測図

整するためのものと考えている。遺物はわずかに瓦器碗と土師質皿の細片が出土している。建物の性格としては総柱であることから一般的には倉庫の可能性が考えられるが、同じ柱配置であっても仏殿の可能性もあるわけで、その性格については不明と言わざるを得ない。なお、この建物の主軸方位はN－1°－Eでほぼ真北といっていい。

SB－02　桁行4間、梁間3間の掘立柱建物である。堀形は円形で直径20cmと建物の規模に比してやや小さい。深さは20cm前後と浅く、かなり削平を受けたことが考えられる。柱間は桁・梁行きとも2.1mを基本としているようであるが、ところどころで数値にばらつきが見られ、全体としてやや歪なものになっている。建物の主軸方向はN－9°－Wと大きく西に振っている。出土遺物はほとんどなく、いくつかの柱穴から磨滅した瓦器碗の小破片や土師質皿の小破片が出土しているのみである。床面積はおよそ53m²と、今回検出した建物の中ではもっとも平面規模では大きな建物である。

SB－03　桁行3間、梁間2間の掘立柱建物で、北をのぞく三方に庇が付く構造となっている。建物本体の柱間は2.1m前後、柱掘形は直径35cmで深さは50cmほどである。庇部分の柱は建物本体より1.2mほど張出しており、本体の柱と対になっている。柱掘形は25cm、深さは30cm

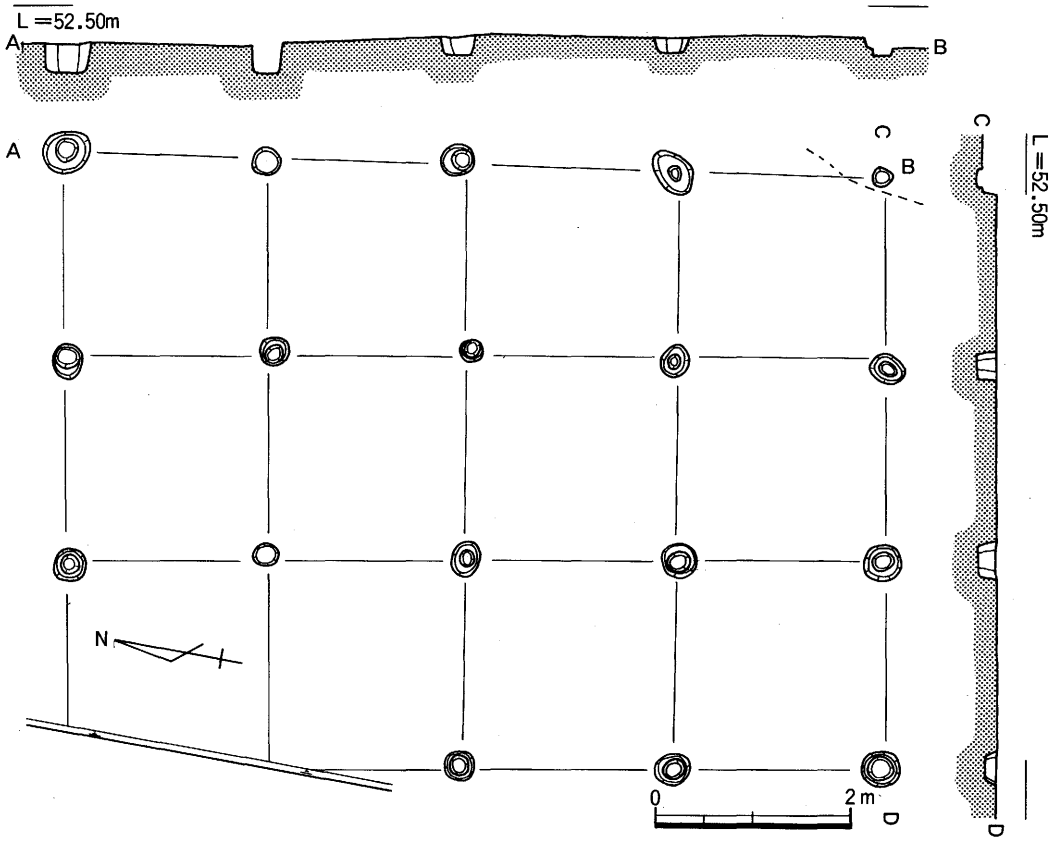


図6　SB—02実測図

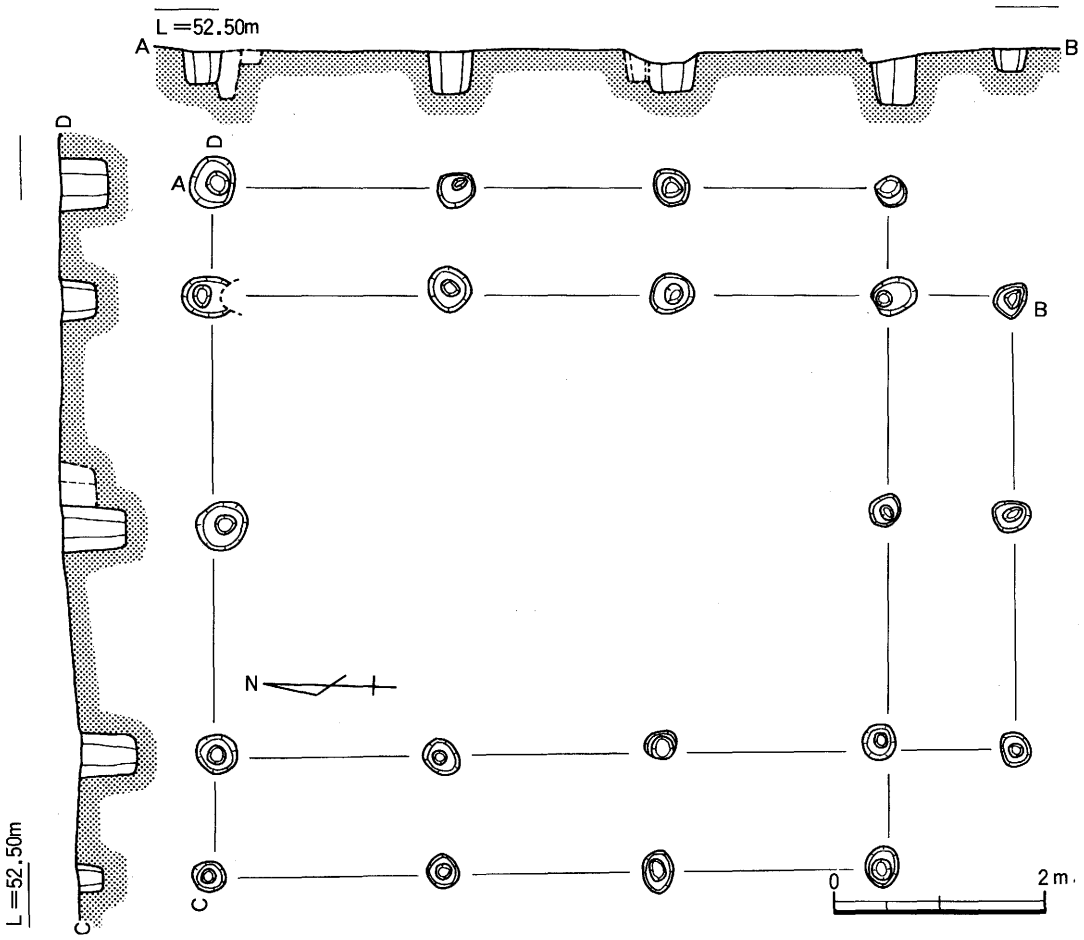


図7　SB—03実測図

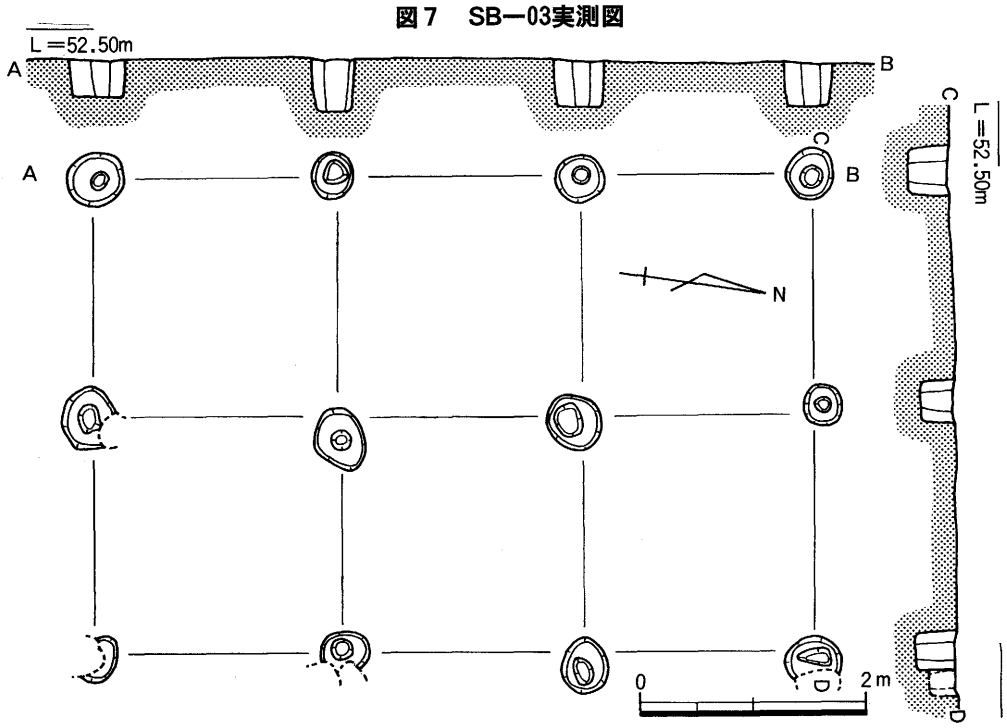


図8　SB—04実測図

ほどを測り、本体部分にくらべて小規模なものとなっている。このうちのいくつかについては柱がわずかに残存していた。なお、庇の南東および南西隅では柱掘形の痕跡が検出されておらず、このことから庇はコーナー部が切れているものと判断される。一遍聖絵などにこのような構造の屋敷が描かれており、時期的には13世紀末から14世紀のはじめにかけての様相を呈するものと言えよう。建物の主軸方位はN－2°－Wとわずかに西に振っている。

ＳＢ－04　桁行３間、梁間２間の総柱の建物である。柱間は2.1m前後を測り、柱掘形は直径40cm、深さ50cmほどである。掘形内から磨滅した瓦器碗の小片がわずかに出土しているのみで時期を限定するほどのものは出土していない。建物の主軸方位は前述のＳＤ－02と同じでN－9°－Wと大きく西に振っている。

ＳＢ－05　調査区西端で検出した建物で、調査区の西外に延びていくものと思われた。このため調査区外の西と東にトレンチを設けこの確認にあたった。その結果、北側には延びないが、調査区の西側でさらに一間延びることが確認された。したがってその規模は、南北２間、東西２間以上ということになる。柱掘形は30cmほどを測る。ＳＤ－01と方位を同じくして重複しているが、その切り合い関係からＳＤ－01に先行する建物と判断される。

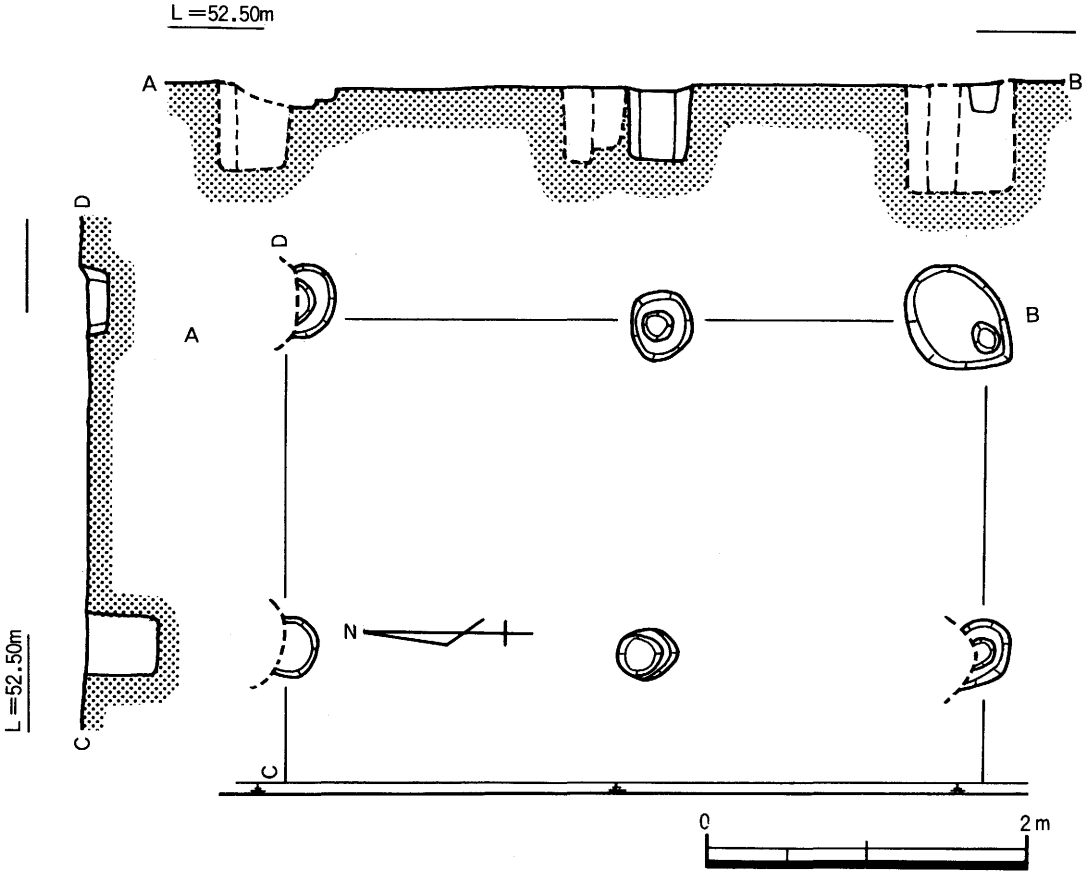


図９　SB—05実測図

2 遺　物

出土した遺物の総量は、調査面積に比して極めて少量である。このことは先にも述べたように遺跡の時期が限られたものであることにもよるが、建物主体の遺構で、日常の生活用品などを投棄した遺構に恵まれなかったことによるものと思われる。

遺物の大部分は、土師質の皿と瓦器の碗であり、磨滅した細片が多い。以下、包含層、遺構ごとに詳述することとする。

第一層出土の遺物　(1)から(13)は土師質の小皿である。いずれも口径に比して器高の低いことが特徴と言えよう。色調でいえば、(2)はやや白味を帯びた淡黄色を呈し、その他のものは橙色ないしは肌色を呈している。胎土は精良で、橙色のものについてはクサリ礫が多く含まれている。(2)(4)(8)は底部の器壁が厚い。口縁部の形態では、横ナデが強く外反するタイプのものと底部から口縁端部にかけて内弯気味に丸く立ち上がるタイプのものに大別できる。前者の代表例としては(4)と(6)、後者としては(7)と(10)をあげることができよう。

(14)は土師質の大皿である。淡い肌色を呈し、底部から口縁部にかけて丸く立ち上がる。器高は4㎝弱と口径に比して高く、やや深手の皿といえる。(15)も土師質の皿で、橙色を呈し、胎土にはクサリ礫が少量含まれている。体部から口縁端部にかけて外反気味に立ち上がる。(16)は磨滅が著しく灰白色を呈している。一応土師質の皿に分類したが、口縁部の形態から瓦器碗の可能性も考えられる。以上の土師質皿については、概ね13世紀中頃を前後する時期のものと考えている。この時期のものとしては、きわだった特徴があるわけでもなく、調査の進んでいる紀ノ川流域のものと比べても違和感はない。

(17)から(34)は瓦器の小皿・碗である。碗の高台部の形態では、(20)のように台形状のものも認められるが、その他はいずれも退化した断面三角形の形状を呈する。内面の磨きは磨滅が著しくほとんど残っていないが、(33)(34)などでは内底面に連結輪状の磨きが施されている。体部内面については不明だが、おそらく間隔のあく粗略な磨きが施されているものと思われる。このうち器形からみれば、(27)から(31)のように外反気味に立ち上がるタイプのものと、(33・34)のように内弯気味に立ち上がるものがある。前者については一般的に紀ノ川流域で見られるものであるが、後者についてはこの地方の地域色を示すものかもしれない。

(35)は土師質の鍋、もしくは羽釜となるものである。赤茶色を呈し、胎土には砂粒を多く含んでいる。(36)は中国製の青白磁の合子の蓋である。やや緑色を帯びて、発色が悪く粗悪な感がある。(37)(38)はともに中国製の白磁の碗である。高台部が高く、口縁部は端反するタイプと考えられ、時期的には11世紀後半ないしは12世紀初頭にかけてのものと言えよう。全体に灰色味を帯びた乳白色を呈している。(39)は同安窯系の青磁の皿、(40)は口禿げの白磁皿である。

以上の中国製品については、出土した土師質皿や瓦器碗に比べて一時期古く、いずれも伝世

品と考えることができよう。

(41)は東播系の須恵質の鉢で、灰色を呈している。(42・43)は瓦質の土錘である。長さ5㎝、直径1.2㎝ほどで土錘としてはやや小型のものと言えよう。先にも述べたように、調査区のすぐ西に有田川が流れており、この川での漁労に用いられたものと考えている。

ＳＤ－01出土の遺物　(44～47)は土師質の皿である。このうち(46)の土師質皿は明橙色を呈し、焼成がきわめて良く硬質である。また(47)の皿は、雑な貼り付けによる高台が付けられている。この皿も明橙色を呈し焼成はきわめて良い。

(50)の瓦器碗は、ハの字状に張出した高い高台をもつやや特異なものであるが、その他の瓦器碗(51・5 2)は断面三角形の退化した高台となっている。

(53)は中国製の青磁の碗である。暗緑色を呈し、内面には劃花文が施されている。(54)は国産陶器の甕である。外面および断面とも灰白色を呈しており、内面は灰緑色の自然釉がかかっている。頚部のみの出土であるため断定はできかねるが常滑の製品である可能性が高い。(55・56)はは瓦質の土錘である。

ＳＫ－04出土の遺物　(61・62) は土師質の皿である。赤橙色を呈し、焼成はあまく軟質となっている。瓦器碗(63～66)のうち(66)の碗については内面にまばらな磨きが認められる。その他については磨滅が著しく確認はできていないが、高台部の退化状況などから推して同時期のものと思われ、おそらく同様の磨きが施されていたものと考えられる。

ＳＫ－10出土の遺物　(68)は瓦器の碗である。内弯気味に立ち上がるもので、先述したようにこの地域の特徴と言えるかもしれない。(69～74)は平瓦である。いずれも焼成がきわめて良く、灰色を呈している。凹面・凸面とも離れ砂が付着しており、凸面には斜格子状のタタキが施されている。離れ砂の使用およびタタキなどの調整からこの瓦は鎌倉時代ないしは室町時代の初期の瓦と考えている。なお、この瓦と同様と考えられるものが近くの歓喜寺境内から出土している。

(75)は滑石の製品である。やや茶色を呈しており、粒子も粗く滑石としては品質の悪い部類であろう。表面は粗い調整だが側面については比較的丁寧に削り取っている。おそらく温石(おんじゃく)として使用されていたものと思われる。

ＳＫ－12出土の遺物　(76)は土師質の皿で肌色を呈している。口縁部はナデ調整でわずかに外反する。(77)の瓦器碗の高台部は退化して断面三角形を呈しており、13世紀中頃から後半にかけてのものと思われる。

建物ピット内出土の遺物　(90)は砥石である。茶褐色を呈し、木目は細かくかなり使用した痕跡が認められる。その他はいずれも土師質の皿、瓦器の碗・皿である。これらはこれまで述べてきたものと色調・調整などについてもほぼ同じであり、13世紀中頃から後半にかけてのものと考えて大過ないものと思われる。

第１層出土の遺物

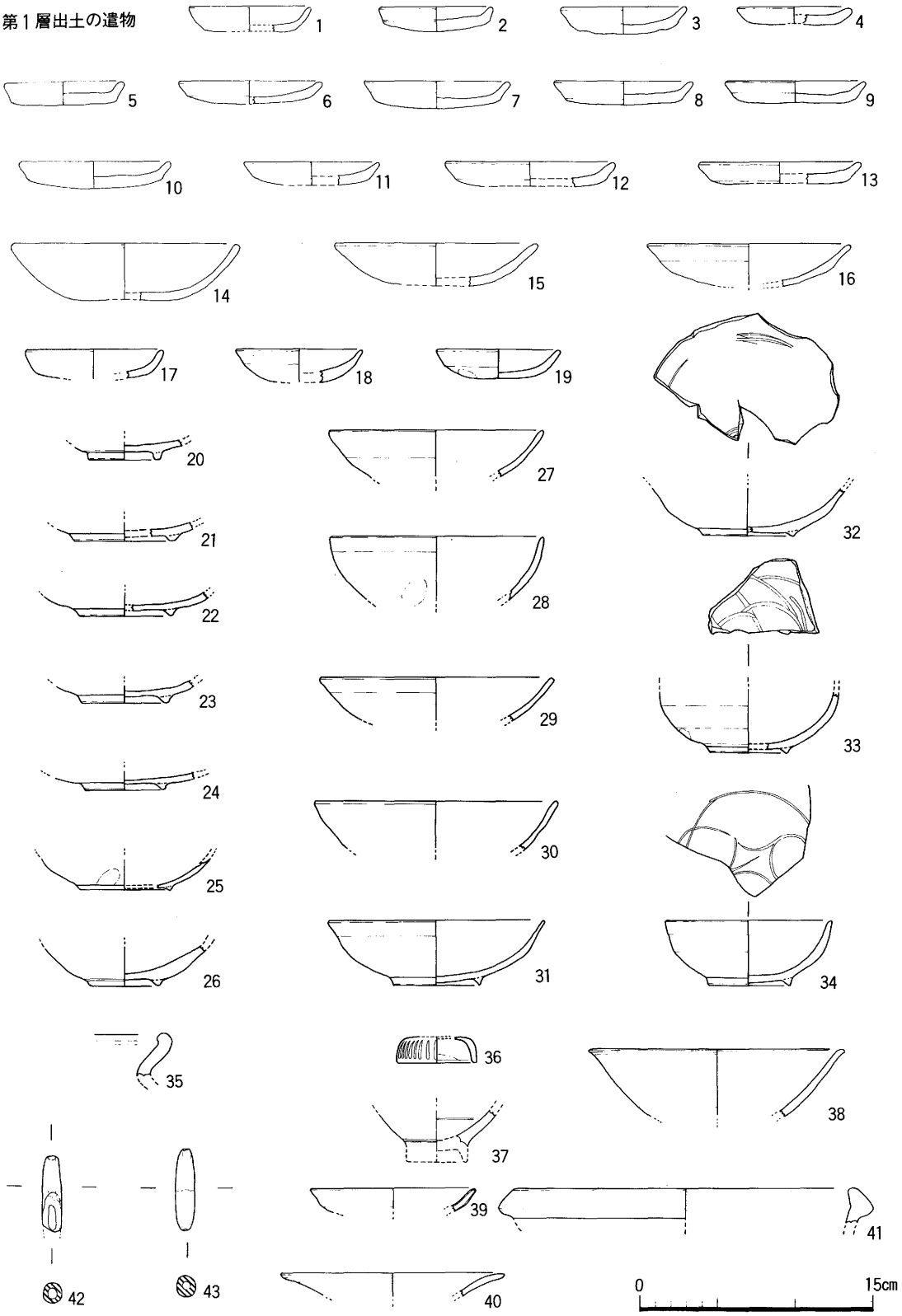


図10　遺物実測図（１）

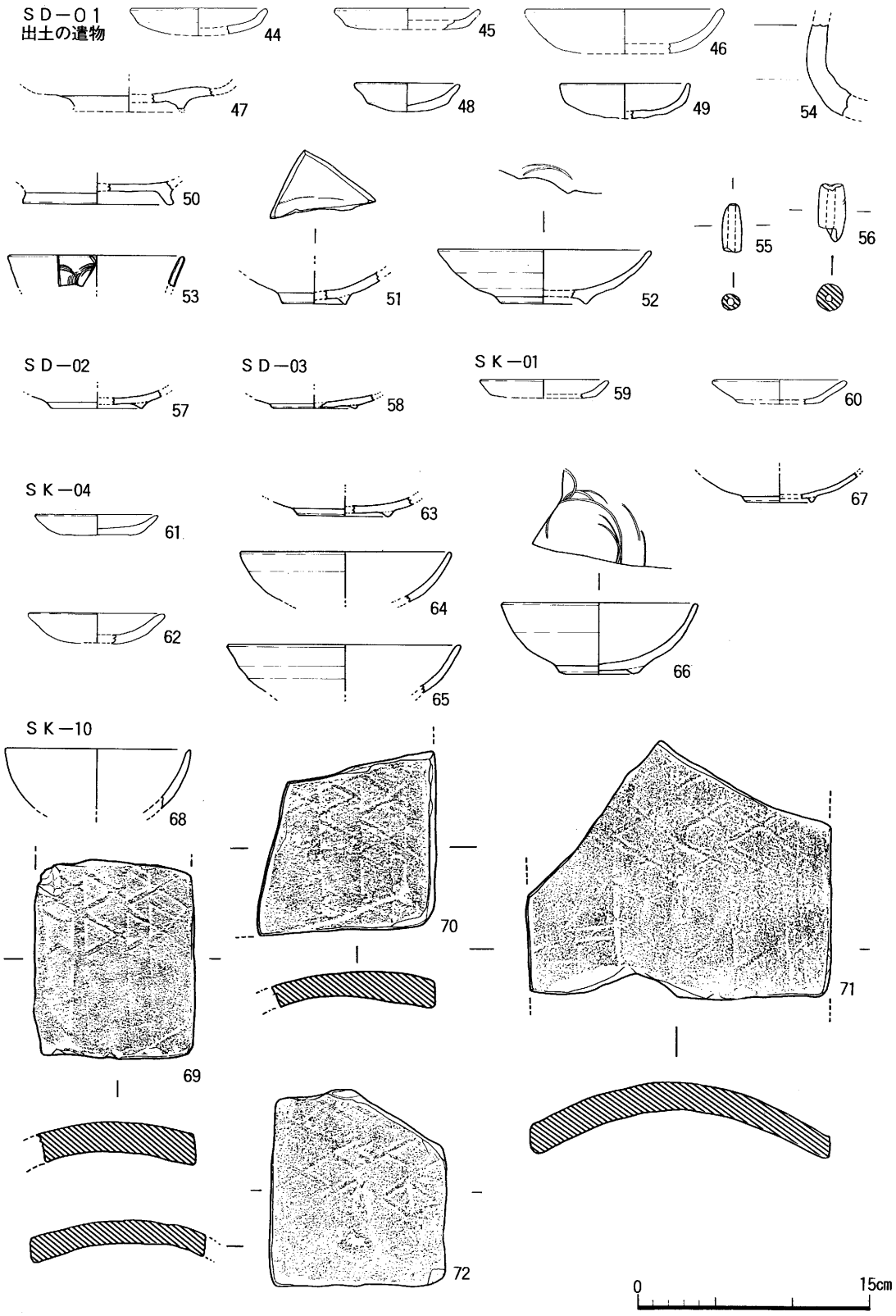

ＳＤ－０１
出土の遺物
44
45
46
47
48
49
54
50
55
56
53
51
52
ＳＤ－02
57
ＳＤ－03
58
ＳＫ－01
59
60
ＳＫ－04
61
63
67
64
62
66
65
ＳＫ－10
68
70
71
69
72
0
15cm

図11　遺物実測図(２)

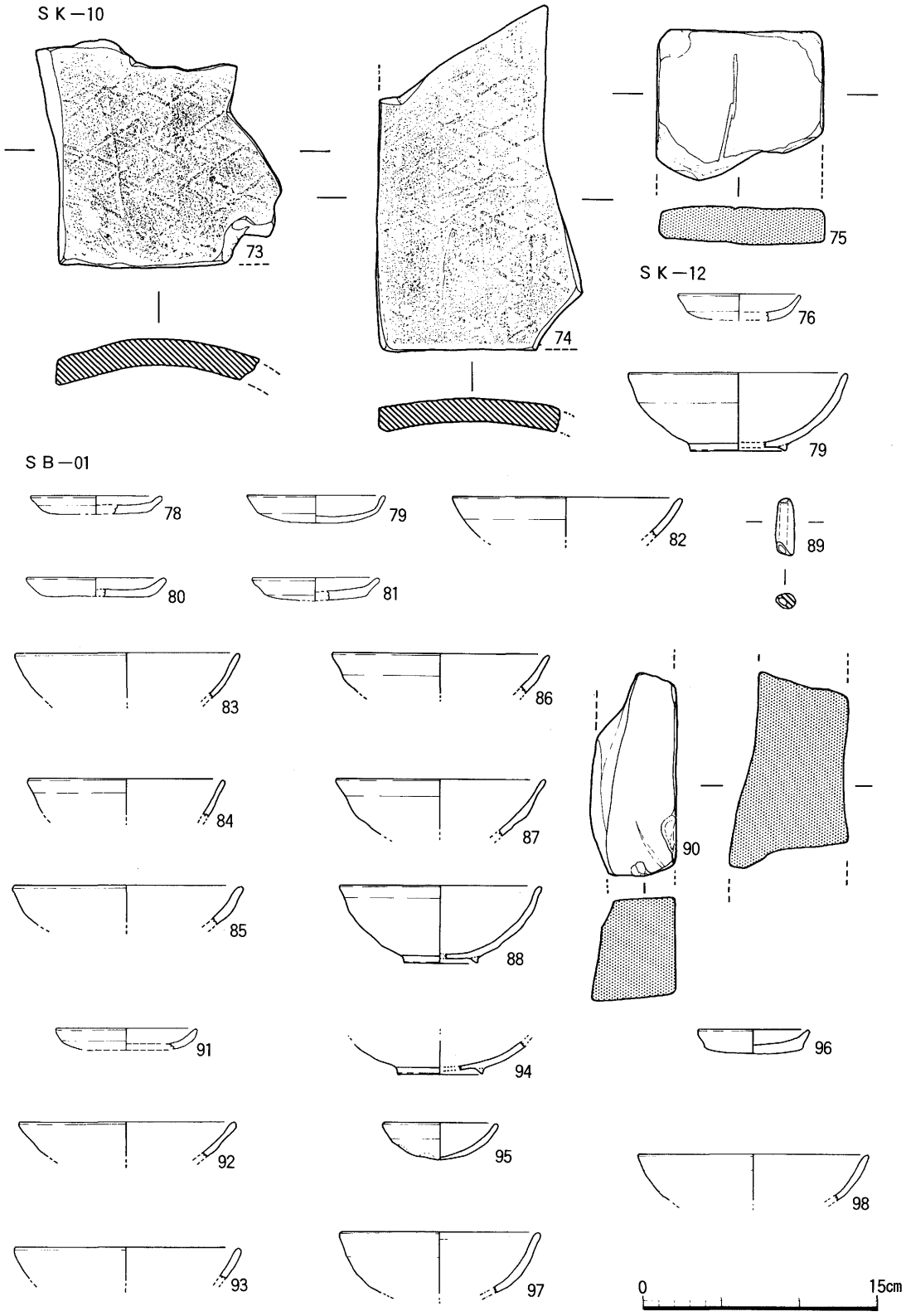

ＳＫ－10
73
74
75
ＳＫ－12
76
79
ＳＢ－01
78
79
82
89
80
81
83
86
84
87
90
85
88
91
94
96
92
95
98
93
97
0
15cm

図12　遺物実測図(３)

Ⅲ　ま　と　め

今回の調査で検出した主要な遺構は、下図に示すとおりである。また、検出した建物の規模・主軸方位等は別表(表１)に示すとおりである。以下、これらをもとに今回の調査成果をまとめ、若干の考察を加えたい。

検出した５棟の建物はいずれも掘立柱建物で、これらの建物は、切り合い関係・主軸方位などから３時期に分けることができる。その場合その新旧関係についてはⅠ期〔建物－２・４〕・Ⅱ期〔建物－５〕・Ⅲ期〔建物－１・３〕との変遷をたどったものと思われる。

しかし、これらの建物の廃絶時期は出土遺物からいずれも13世紀の中頃を前後する時期と考えられるもので、さほどの時期幅をもつものではない。むしろ短期間の内に頻繁に建替えがなされた状況と言えよう。なお、前述した方形区画を成すであろう溝、およびその区画内に建てられていたと考えられる建物(御堂か？)については、その方向からⅢ期、建物でいえば建物１・３と同時期である可能性が高い。

個々の建物の性格については、庇を伴う建物－３は居住用の屋敷と考えられるが、その他に

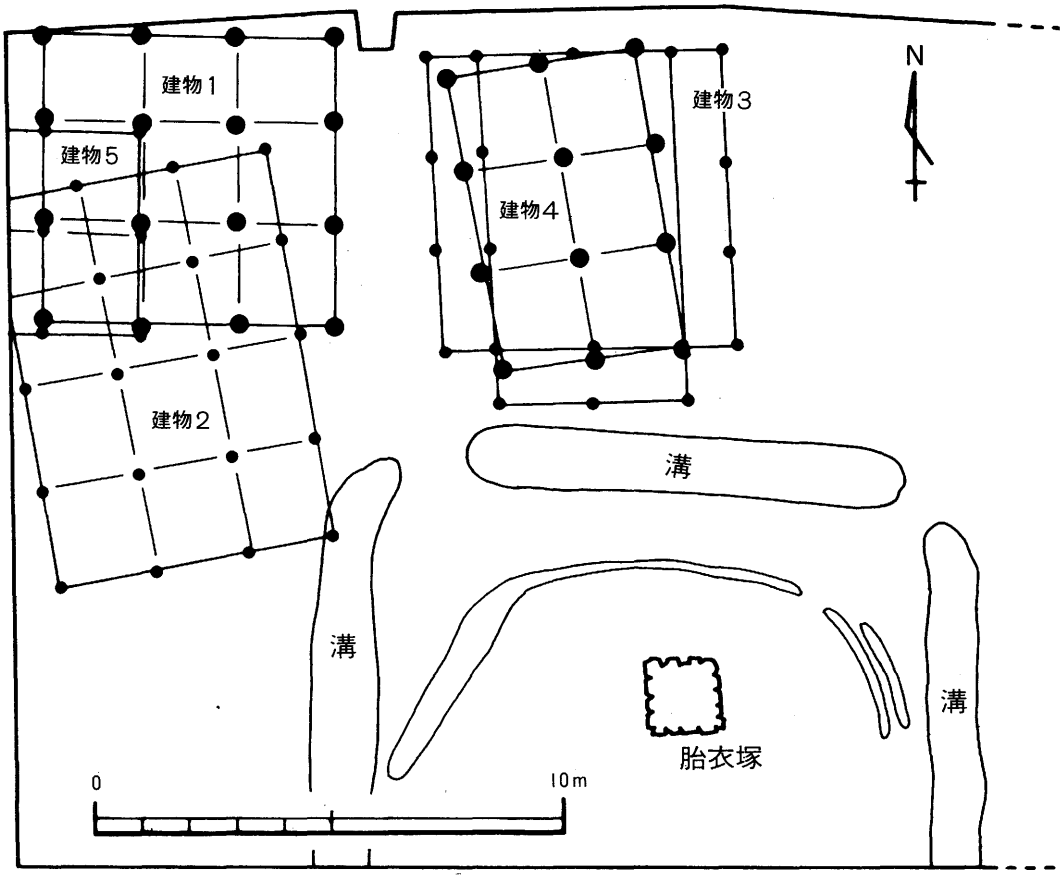


図13　主要遺構配置図

ついては不明と言わざるをえない。瓦は出土しているが、その量は少なく、検出した建物すべてが瓦葺きと考えるにはほど遠い状況である。おそらく桧皮葺きなどの簡素な屋根で、ごく一部に瓦が用いられていたものであろう。

出土遺物については、大部分が日常雑器である瓦器の碗・皿・土師質の皿で、これらにまじって瀬戸の灰釉皿・常滑の壺・東播磨地方で生産された須恵質の鉢が出土している。そのほかきわめて少量ではあるが、中国製の白磁の碗・青磁の皿・青白磁の合子も出土している。

これらの遺物の出土量および組成は、きわだった特徴を示すものではなく、この時期の一般的な遺跡の在り方と同じといってよい状況である。したがって出土遺物からこの遺跡の性格を云々することは難しいと言える。

しかしながら、前述した建物の規模および規格性、さらには方形に区画する溝の存在などを考えあわせれば、これらの遺構は当時の一般庶民の住居に係るものではなく、当地における有力者の屋敷跡と考えることが妥当と思われる。

その場合、当然ながら明恵との関係が問題になろう。つまり今回検出した建物が彼の生まれ育った屋敷、すなわち父・平　重国の屋敷かどうかという問題である。仮にそうだと仮定すれば、明恵の生年から推しておそくとも12世紀の後半には営まれていたと考えなくてはいけない。

今回の調査では、再三述べてきたように、伝世品と考えられる中国製の磁器をのぞけば出土遺物の大半は13世紀のもの、それも13世紀の中頃を前後する時期のものと考えており、少なくともも50年余の時間的なズレが生じることになる。

したがって、今後遺物の年代観が修正される可能性もあるが、現段階では今回確認された建物をストレートに明恵と結びつけて考えるには躊躇されるものと言えよう。

それでは逆に13世紀の中頃とは明恵の関係で言えばどのような時期に相当するのであろうか。明恵の寂年は貞永元年(1232)で、13世紀の前半にあたる。その没後、弟子の喜海が上人を追慕し由縁の地に一堂を建立し歓喜寺と号したとされる。歓喜寺は今回の調査区から東側100mほどのところ所在する寺で、寺伝では平安時代の中頃、恵心僧都の開基とされているが、文献資

	規　模	桁長×梁長	面　積	堀　形	柱　穴	主軸方向	時　期	備　考
建物 1	3間×3間	6.3×6.3	39.7m²	45cm	25cm	N−1°−E	13世紀	総　柱
建物 2	4間×3間	8.4×6.3	52.9m²	35cm	20cm	N−9°−W	13世紀	総　柱
建物 3	3間×2間	6.3×4.2	26.5m²	35cm	17cm	N−2°−W	13世紀	東・西・南に庇が付く
建物 4	3間×2間	6.3×4.2	26.5m²	40cm	20cm	N−9°−W	13世紀	総　柱
建物 5	2間以上×2間	—×4.2	—m²	30cm	15cm	—	13世紀	総　柱

表1　掘立柱建物一覧表

料あるいは出土遺物からも鎌倉時代以前に遡る事蹟を証徴するものはないとされている。

おそらく浄土宗の寺院としていつの頃からかつづいていたものを、この時期、喜海の発願により明恵上人追慕の寺として再建されたものと考えられる。(むろんこの事業については喜海ひとりの尽力によるものではなく、明恵の生前から帰依し、その保護者であり明恵にとっては母方の伯父でもある当地周辺の有力者・湯浅宗氏の援助が大であったことが知られている。)

この再建時期については明らかでないが、現在残っている資料などからすれば建長年間(1249～1258)、すなわち13世紀の中頃と考えてまず間違いないものと思われる。

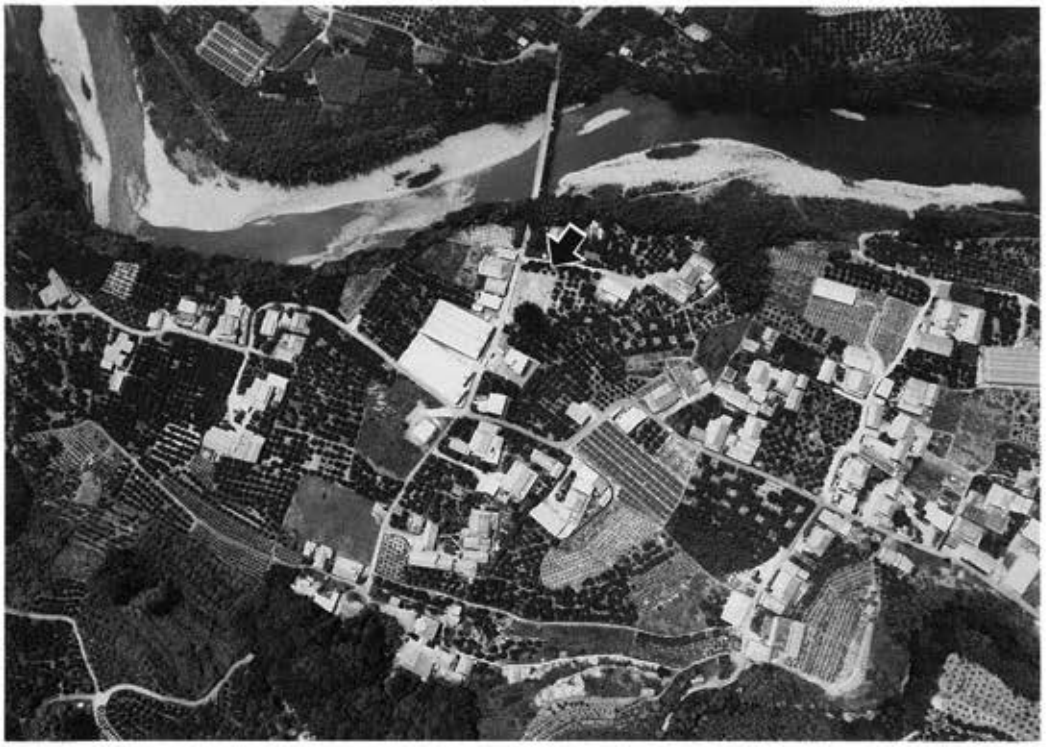
今回の調査で検出した遺構もまさにこの時期のものと考えており、両者のあいだに何らかの関連を見出すこともあながち無理なこととは思えない。そのひとつの傍証として、今回の調査で出土している斜格子のタタキをもつ瓦は歓喜寺の再建時の瓦と考えられ、金屋町史に掲載されている連朱文の軒平瓦がきわめて酷似していることもあげられよう。

ただし、以上のことはあくまで憶測であって、今回の調査から即断されるものではない。時期的には近似し、生誕地とも伝えられていることからすれば、おそらくは広い意味で明恵ゆかりの人々の屋敷地と考えて大過ないであろうが、生誕地とされていることを理由にことさら明恵と関係させて考えることは厳に慎むべきものと思われる。

幸い遺構の残りは良く、屋敷地はさらに周辺に広がっていく可能性がきわめて高いものであり、屋敷の性格や明恵との関係については今後の周辺の調査を待って再度検討し、位置付けていく必要があろう。また、そのことによって金屋町における中世の歴史がよりいっそう明らかになるものと思われる。

最後に調査担当者として、当地周辺が明恵上人の遺徳を偲ぶよすがとして、また、金屋町における重要な遺跡のひとつとして整備され、永く保存されていくことを切に願ってやまない次第である。

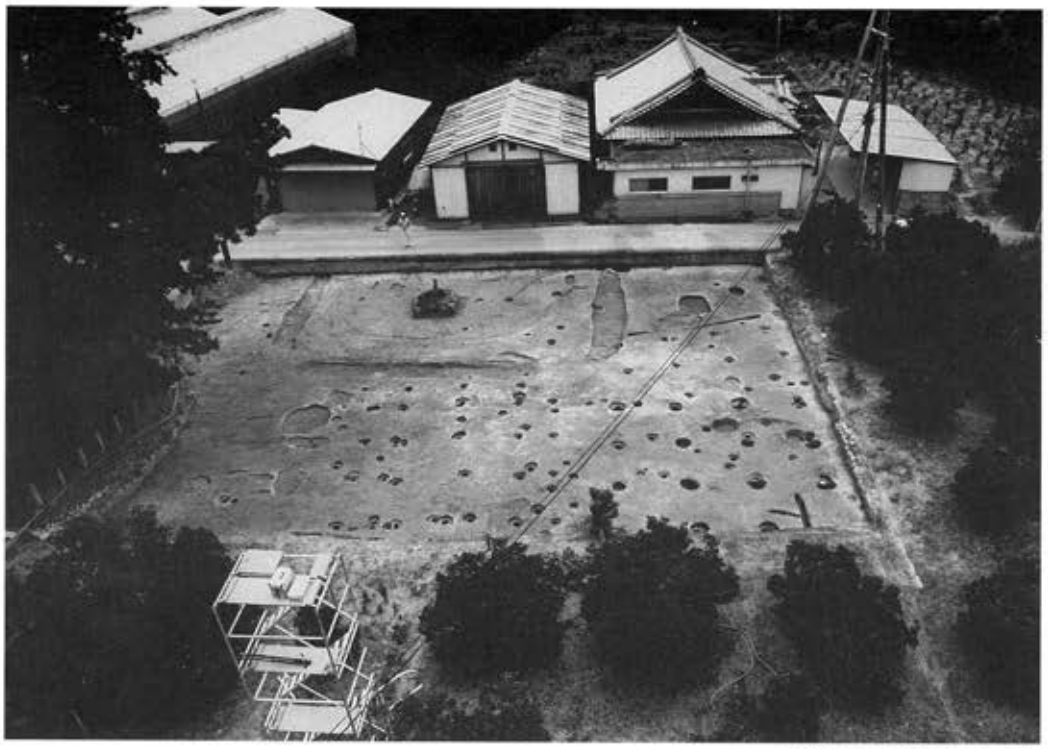
図版 1



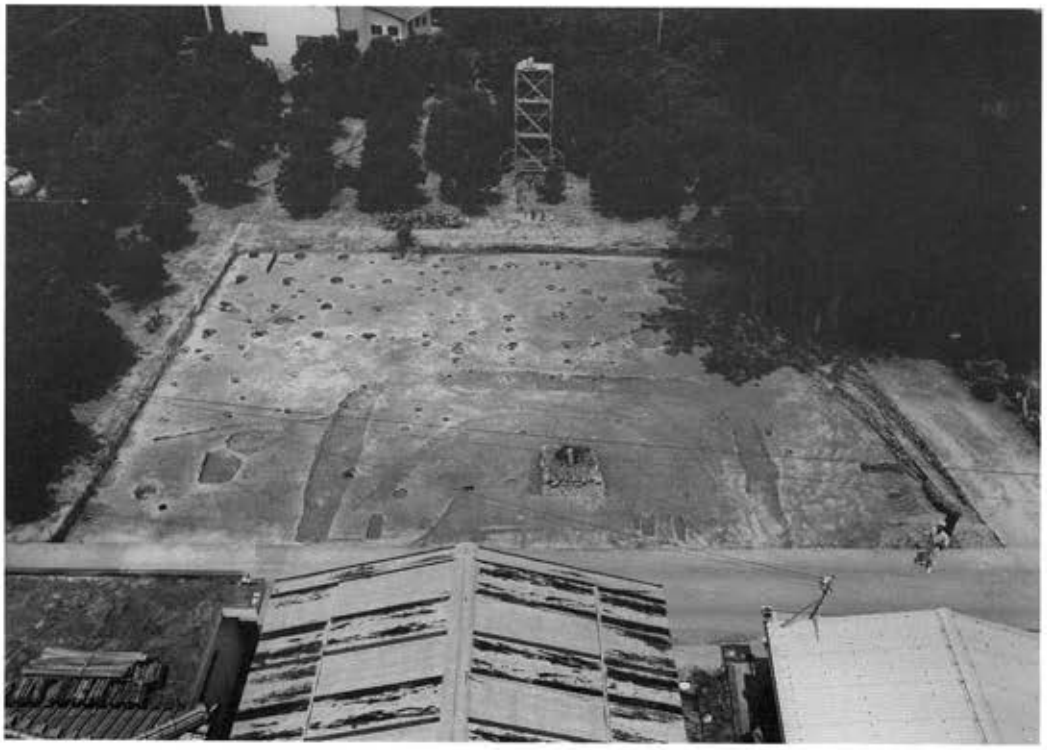
調査区周辺航空写真

調査区前景（南東から）

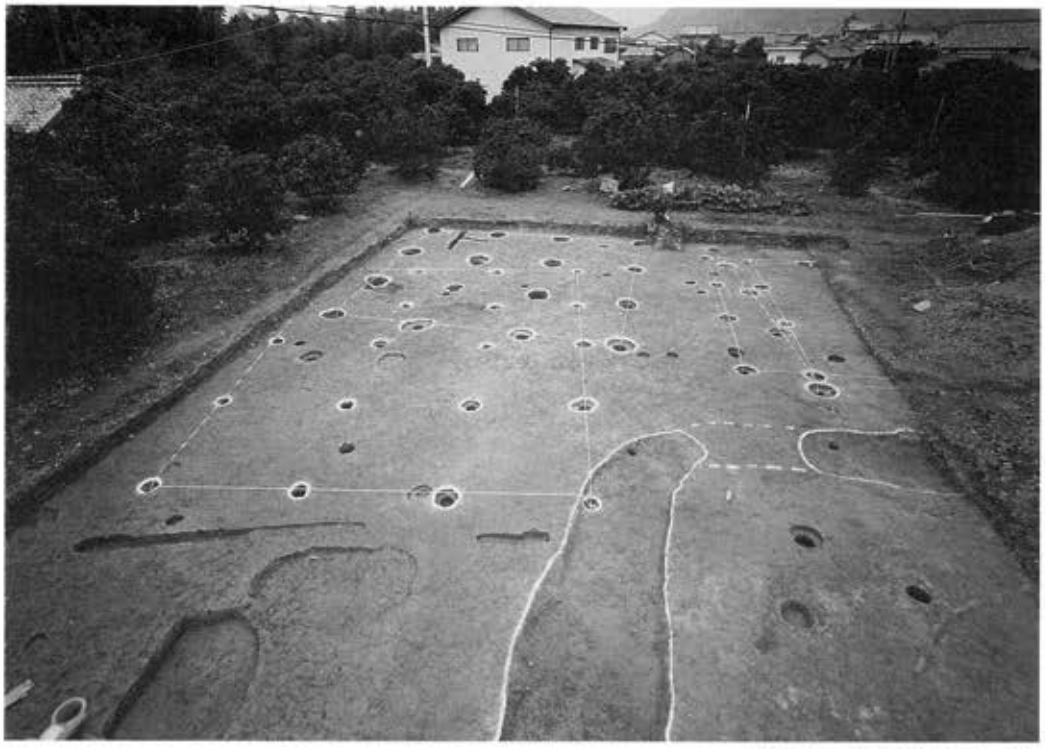
図版２



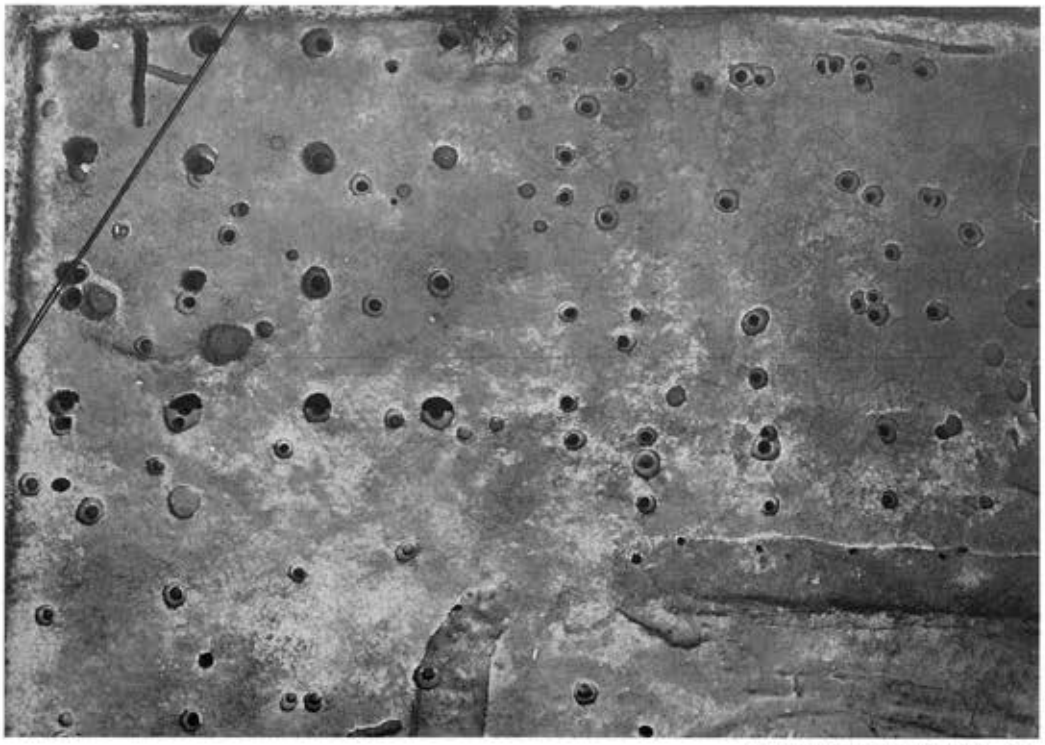
調査区全景（北から）



調査区全景（南から）

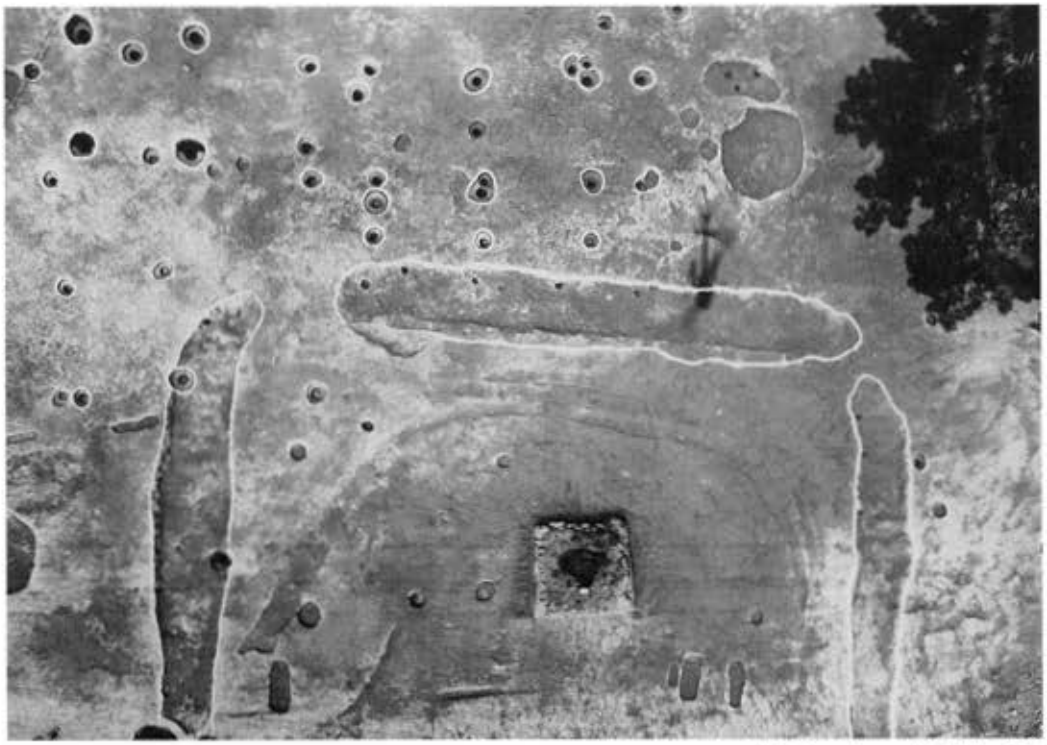


調査区西半部（南から）



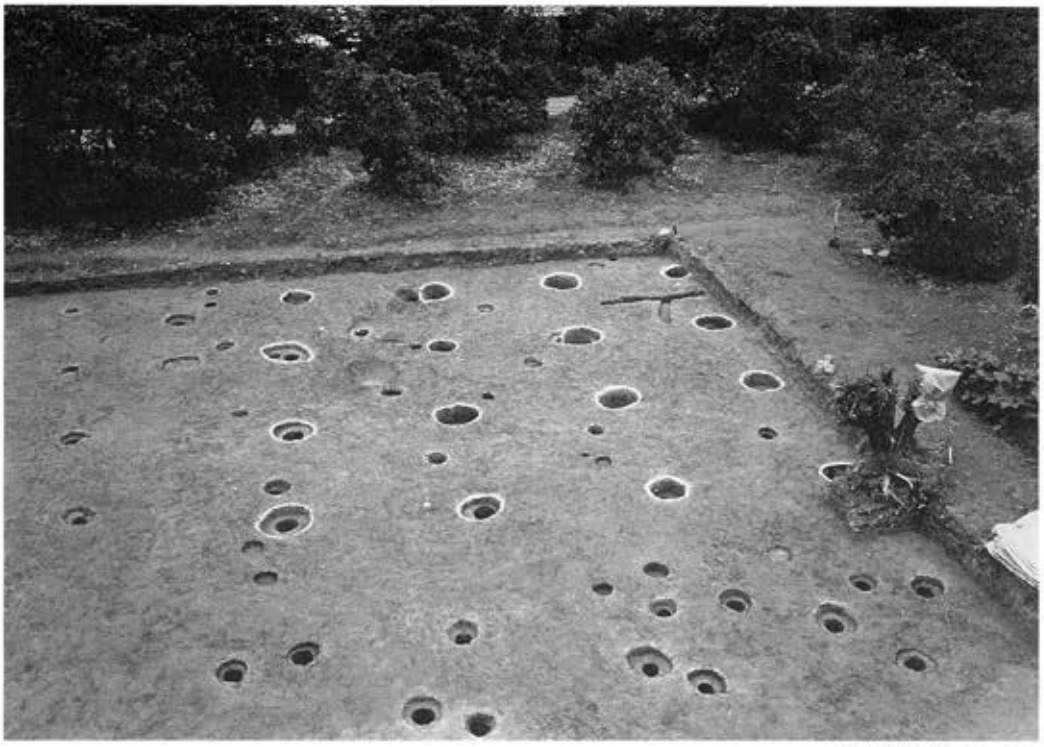
調査区北半部（南から）

図版4

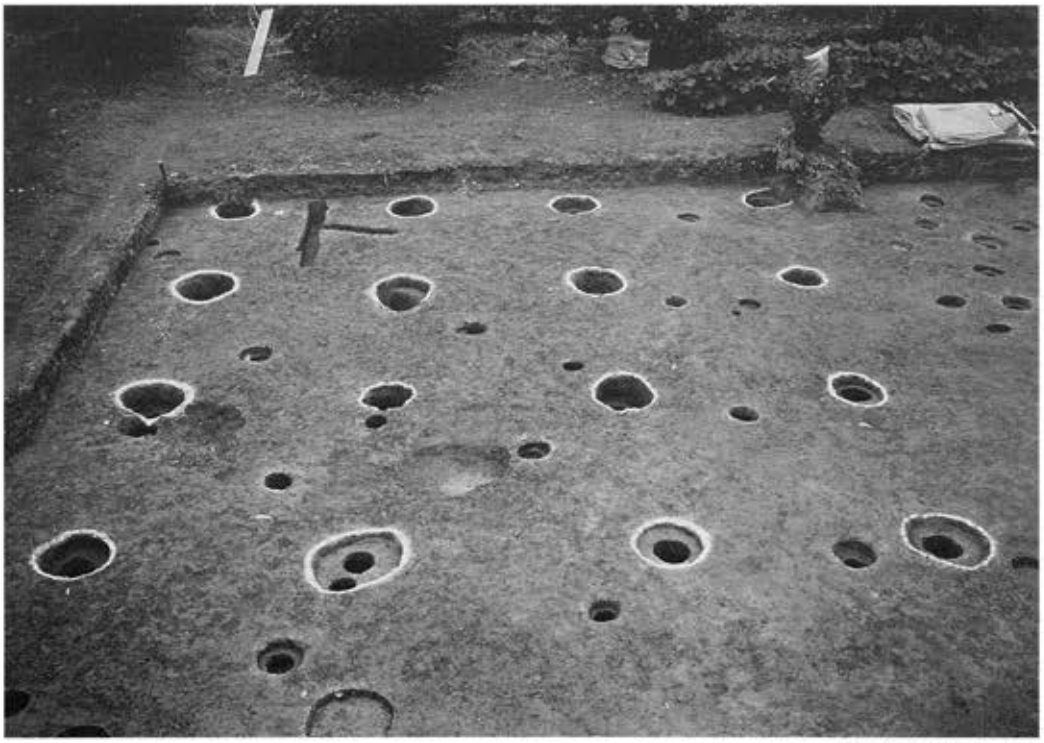


溝1・2・3（上から）

溝1・2・3（北から）

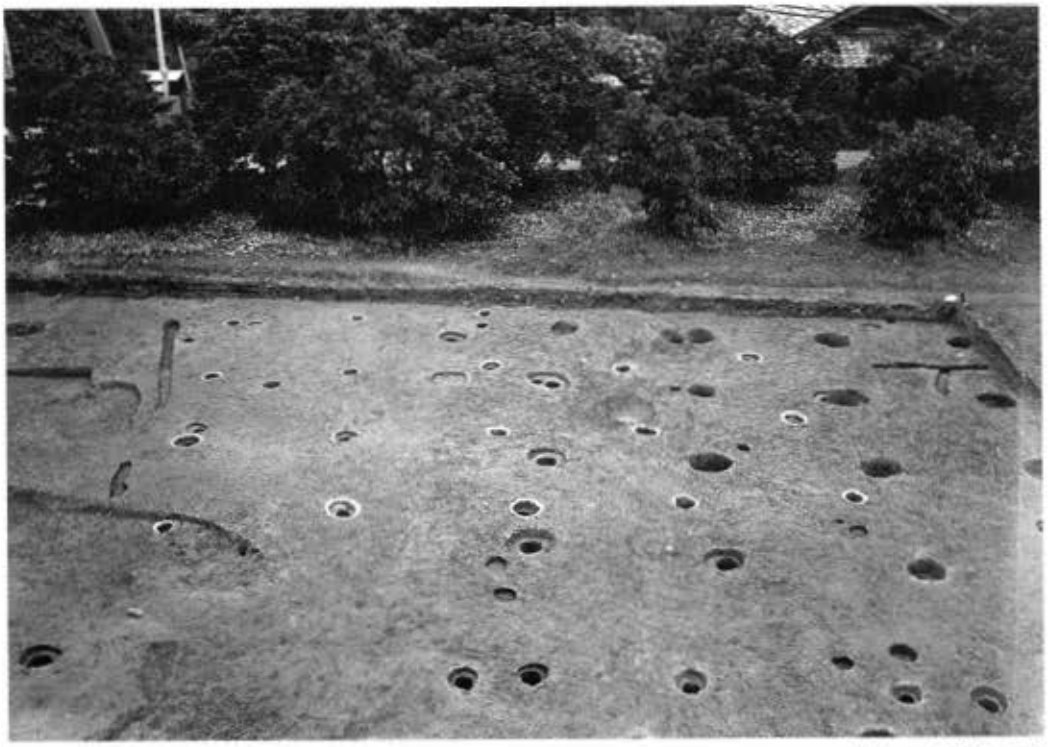


建物1（東から）

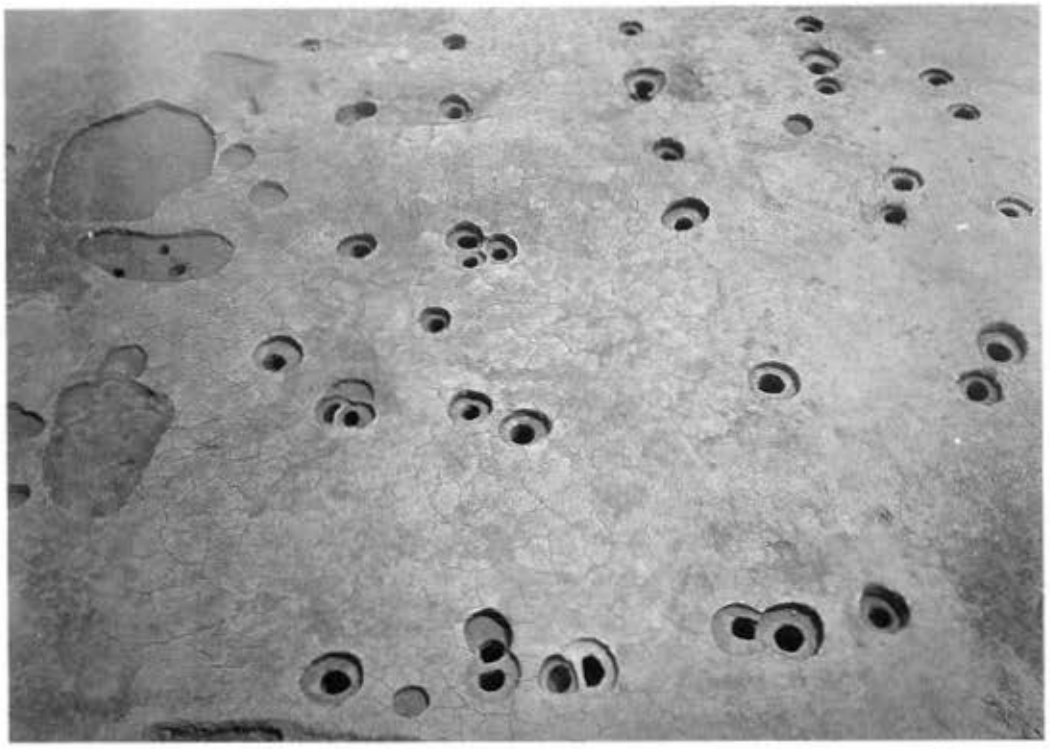


建物1（南から）

図版6



建物2（東から）



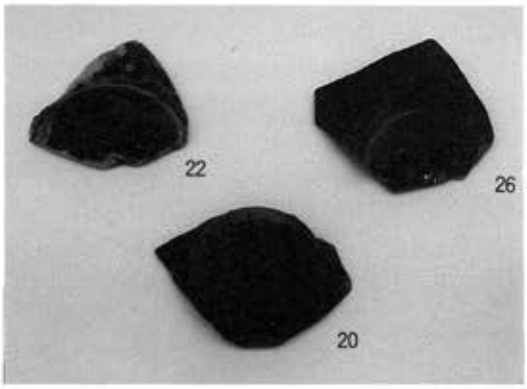
建物3・4（北から）

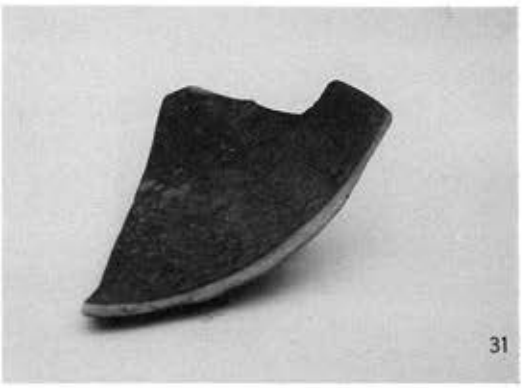
3

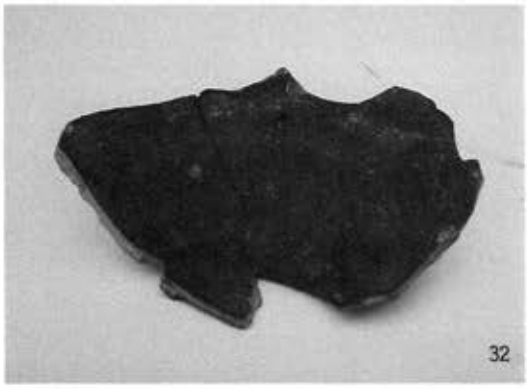
14

10

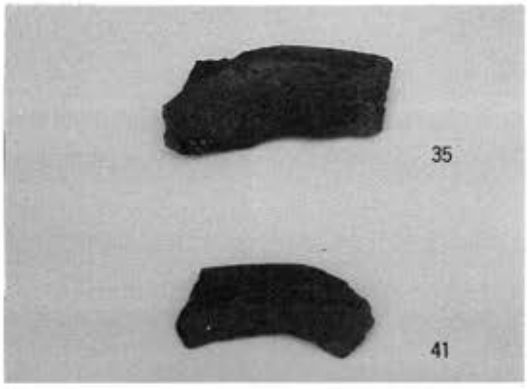
18

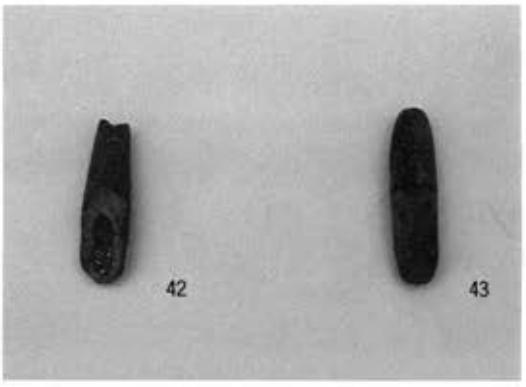

22
26
20


31

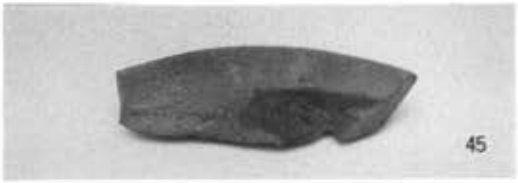

32

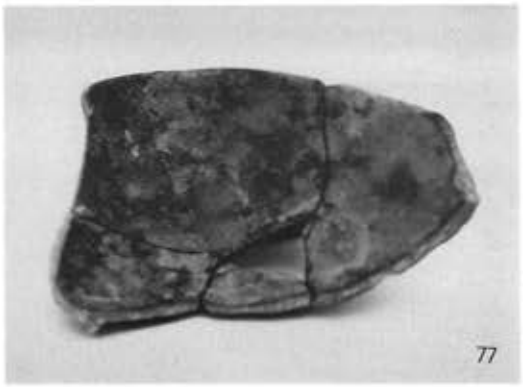
34


35
41


42
43

図版8





明恵上人遺跡発掘調査概報

平成４年10月

編集
発行　㈶和歌山県文化財センター

印刷　中央印刷株式会社